柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401/044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 196 号

古老は語る
宮野薫さんのお話 3

岡上の人々と戦争（その３）

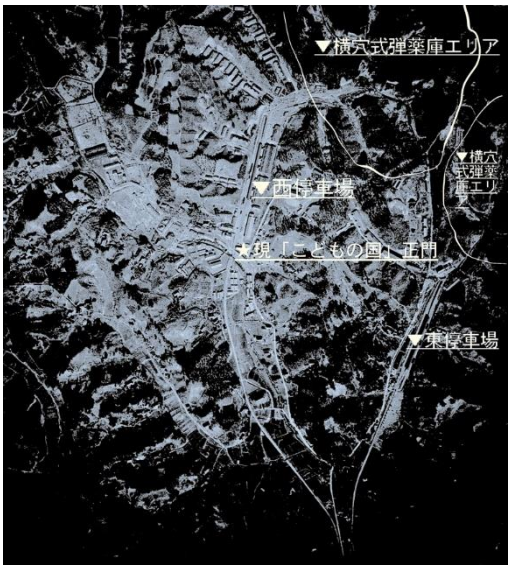
（聞き手、筆録、コメント＝小関 和弘(柿生郷土史料館専門委員)）

＊隣家の東京の親戚の同い年の友人に「昔東京でも戦争ごっこやったのか」と聞いたら、玩具屋に子供用の服から、鉄兜、小銃、背のう迄売っていて、それで身支度してやったと云うので、田舎とは大分違うと思った。

・岡上では正月の 2 日に尋常 4 年から高等科 2 年までの男子約 50 人が東西に分かれて「兵隊ごっこ」をやった。和光大学の「地域・流域社会論」授業に鳥海輝治さん、梶晴夫さん、宮野薫さん、海老沢芳夫さんをお招きして座談会形式でお話を伺ったことがある（2010 年 5 月)。後日「岡上の昔の子供の遊び」の一部として紹介したい。

・サビーネ・フリューシュトゥック『「戦争ごっこ」の近現代史』（人文書院、2023 年）は江戸期から第二次大戦を経て現代に至る日本の「戦争ごっこ」や紙の「戦争ゲーム」、漫画、アニメ等の戦争イメージと子ども像を検討した労作。詳しくは「岡上の昔の子供の遊び」で触れたい。

＊親戚の叔父から聞いた話。昔、奈良の弾薬庫（こどものくに）に土地が買収されたが値段は結構良かった。



田奈弾薬庫航空写真（1944 年陸軍撮影：国土地理院 地図・航空写真サービスによる)。

・「奈良の弾薬庫」は通称「田奈弾薬庫」。正式名称「東京陸軍補給廠田奈部隊填薬所」。砲弾等への火薬装填を行なった。用地買収は 1938（昭和 13）年頃から始まったという。

・こどもの国協会編『こどもの国三十年史』（1996 年）には以下の記述が見える。「昭和 8 年から 11 年ころにかけて、奈良地区の山の中を見なれぬ人びとが 2、3 人ずつ、地図をもって歩きまわっている姿を村人たちが見かけるようになった。（略）巡査が駆けつけて、職務質問すると、「近衛師団経理部・将校」の名刺をわたされた。（略）昭和 13 年春（小関注：この年 4 月、人的、物的諸資源を国家が統制・運用することを目す「国家総動員法」が公布された）のある寒い日、約 100 人の地主が奈良小学校（当時）にあつめられた。（略）近衛師団の者が「この土地は戦争のために必要であるから、軍が買い上げることになった。承知せよ」といった。買い上げ価格は、場所により多少の違いはあったが、だいたい田 1 反（10 アール）当たり 450 円、すなわち坪（3.3 平方㍍）当たり 1 円 50 銭であった。畑は 1 反当たり 320 円、山林は 1 反当たり 135 円、宅地は坪 2 円くらいであった。（略）返事を保留した者や買い上げ価格に異議を申し述べた数人は、後日、東京・麹町の近衛師団司令部へ出頭を命じられ、軍刀をかまえた憲兵のまえで、結局、承諾させられた。この敷地の 3 分の 1 をしめる鶴川村三輪地区（いまの町田市三輪町）においても、地主たちが「印鑑をもってあつまれ」と、村の妙福寺に召集され、憲兵が弾薬庫の必要性をぶったのち、売買契約書に判をおさせられた。買い上げ地域内に住んでいた 12 戸の農家は半年以内の立ち退きを命じられ、家屋移転費として坪あたり約 43 円が支払われた。」

　時と所は異なるが、厚木基地建設のため 1941（昭和 16）年に綾瀬、渋谷、大和各村の土地を海軍が買収した価格は、坪当り 1 円 50 銭、農作物に対する補償 50 銭で、反当り 600 円だったという（「旧渋谷村福田一座談会」『大和市史研究』10 号、1984 年)）。

・「田奈弾薬庫」へ動員された神奈川高女（現神奈川学園）の生徒・酒井智恵子氏の『田奈の森　学徒勤労動員の記』（近代文藝社、1995 年）は『続 田奈の郷土誌』（同編集委員会、1966 年）の記述等を参照しながら、弾薬庫での日々や凄惨な事故・事件、自身の心情・心境の数々を含め、戦中戦後の女学生の生活が克明に記された優れたドキュメント。動員時（1944 年 6 月～）に酒井さんは報奨金月 17 円を支給されたという（同書、p.49)。1941 年に製糸女工の日額平均賃金が 93 銭だったことからすると（森永卓郎監修『明治／大正／昭和／平成　物価の文化史事典』（展望社、2008 年)）危険や労働の重さを勘案すれば、さほど高額ではなかったようだ。　（続く）

シリーズ
禅寺丸柿の歴史 6

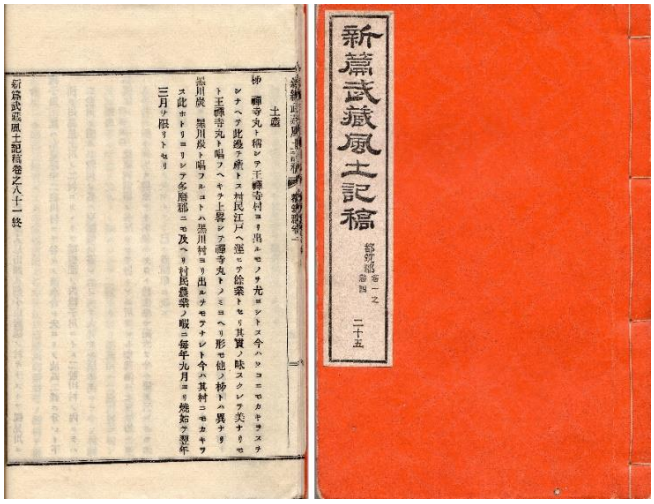
近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(6)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

江戸時代後期、王禅寺村の余業は禅寺丸柿

江戸時代に慣例的に使われてきた「農間余業」とは、農民が農閑期に農業以外の兼業を行っていたことを指す用語であった。農間余業は、江戸時代後期に盛んとなったとされている。

都筑郡・橘樹郡の各村々でも農民が盛んに村外へ稼ぎにいく出商人の実態が増えていった。天保 14 年(1843)の「橘樹・都筑郡村々出商人取調帳」(『神奈川県史資料編 7　近世(４)』)によれば、鶴見川流域の佐江戸村・池辺村・折本村・大熊村・川向村・新羽村・吉田村・鴨居村・本郷村や早淵川流域の勝田村・山田村・高田村に飴菓子、甘酒、紙、墨、筆、元結類などを扱う出商人がいたことが判明している。取扱い品目の中に禅寺丸柿はでてこない。禅寺丸柿は、江戸市中に売りにだされ、江戸の人々に好評を博したと言われている。専ら江戸に搬出されたものであろう。このことについて、神奈川県農会が明治 43 年(1910) 1 月に行った禅寺丸柿の調査結果にも江戸に移出したことを次のように記している。「徳川氏の武蔵野を開きて江戸に創(はじ)むるや江戸に近き王禅寺の村は自然出入往来して菜果を移出することを覚へ　今まで一村の秋珍たりし丸柿を江戸の市中に現れては諸人の愛喫を受くることゝなりしより　自然に禅寺丸の称号は忽ち王禅寺に隣接する村々一體に傳播せり　當時は果物としては蜜柑、柿、栗、梨の三種類に過ぎず　中にも此の禅寺丸は廣く大方の嗜好に遭ひたり(中略)特に元禄、享保の頃は最も多く愛喫せられ　栽植亦従て多し文化、天保の頃に至りて一進一退以て幕末に及べり」(『神奈川県農会報』第 56 号)と、江戸で長年にわたり人気を博し、ことに元禄(1688～1704)、享保(1716～1736)の頃に最も多く運び込まれていた様子をうかがい知れる。このことについて『新編武蔵風土記稿巻之八十一』の土産の項目で柿は、「余業」として江戸に出していたことがわかる。



『新編武蔵風土記稿』(1884 年刊)に
記された禅寺丸柿　　筆者蔵

すなわち「禅寺丸ト称シテ王禅寺村ヨリ出ルモノヲ尤ヨシトス　今ハソコニモカキラス　ヲシナベテ此辺ヲ産トス　村民江戸へ運ヒテ餘業トセリ　其實ノ味スクレテ美ナリ　モト王禅寺丸ト唱フヘキヲ上畧シテ禅寺丸トノミヨヘリ　形モ他ノ柿トハ異ナリ」と記し、さらに王禅寺村の項では「柿ノ木ヲアマタウエテソノ実尤美ナリ　江戸ニテ禅寺丸ト称スルノハ此所ノ産ナリ」と、江戸時代後期に王禅寺村付近の村々にも禅寺丸柿栽培が広まったことにも言及している。

江戸時代後期に禅寺丸柿は、江戸西郊の都筑郡を代表した果実として、大消費地であった江戸へ運び込まれた様子を伝えている。ことに王禅寺村の村民にとって禅寺丸柿は大切な余業であった。これらの足跡を通してみるだけでも、江戸時代における余業の発達史の中でも、先駆け的存在であったと位置づけられよう。

江戸に禅寺丸柿を移出した村々を探す

『新編武蔵風土記稿』を読むと、王禅寺村の外に都筑郡や橘樹郡の村々でも柿を江戸に運び込んで、余業として扱われていたことが確認できる。例えば下麻生村では「此辺村毎ニ柿ノ木ヲウエ実ヲトリテ余業トス」と、金程村では「此ホトリノ村々ハ柿ノ土性ニ宜シキヲ以テ所々ニ植ヲキ秋ニ至レハ江戸へ送リテ産業ノ資トス」と、また諏訪河原村では、「産物ハ柿ノ木地ニ応シテ実ノリヨケレハ秋コトニ江戸へ鬻(ひさ)(売る)ケリ』と、末長村では、「産物ハ柿果土地ニ相応シテ味ヒ他ニマサレリ」と、井田村では「産物ナキユヘ多クハ柿ヲ植ソノ実ヲ鬻テ以生産トス」と、王禅寺村を中心にその界隈の村々で禅寺丸柿の栽培が盛んで、大消費地である江戸に運び込んで、武士や商人など大勢の人々の食料供給の一役を担っていたと言える。

天保 3 年(1832)に橘樹郡宿河原村を訪れた『南総里見八犬伝』の作者として知られる戯作者の曲亭馬琴は、「宇那根(うなね)村は柿樹多し」と、柿樹が多い村だと、その様子を短く綴っている(『兎園小説余録(とえんしょうせつよろく)』)。

（続く）

シリーズ
歴史の中の女性像

その１　ナイチンゲールの世界（13）

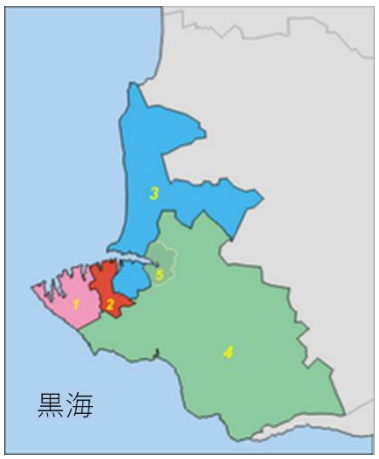
小林　基男(柿生郷土史料館専門委員)

クリミア半島視察とクリミア熱の罹患

スクターリの病院の改善が一定の水準に達したのを見届けたフローは、クリミア半島のバラクラヴァにある戦地に最も近い野戦病院の視察に出かけます。前号に記したメアリー・シーコールが民間の医師兼看護士として活動している地域です。スクターリの軍医たちは、疲れた身体でクリミア半島に出かけるのは、いかがなものかと強く彼女を引き留めようとしました。クリミア熱と呼ばれた原因不明の風土病に、彼女が罹患することを恐れたのです。何かとフローと対立する事も多かった軍医や司令官も、彼女が女王の覚えもめでたい名門の令嬢であり、彼女に万一のことがあれば、自分たちが責任を問われることを、良く知っていたのです。軍医長官は、フローの任地がスクターリとだけ記され、クリミア半島が含まれていないことまで持ち出して、クリミア行きを思いとどまるよう説得したのですが、無駄でした。フローは、彼らの説得を無視してクリミア半島のバラクラヴァに出立したのです。

現在のウクライナとクリミア半島。半島南西端の黒点がセヴァストポーリ要塞とバラクラヴァ

しかし、前年９月より無理に無理を重ねて、疲れきっていたフローの身体には、クリミア行きはやはり無謀だったのです。バラクラヴァに到着したフローは、スクターリの病院で治療を受け、恢復して戦地に戻った兵士たちや、その仲間たちに囲まれ、歓迎されました。1855 年５月上旬のことでした。フローは早速バラクラヴァの二つの野戦病院を視察したのですが、視察中に彼女は倒れます。当時の医学水準では原因も病原菌も特定できず、一括してクリミア熱と呼ばれていた風土病に感染してしまったのです。当然クリミア熱に有効な治療法もありませんから、ひたすら何もせずに一日中安静に過ごすしかありません。高熱を発する病ではないのですが、内臓の機能に影響するのか異様に身体がだるく、頑張り屋のフローですら働く気力が湧かなくなってしまう質の悪い病いでした。フローは一時重篤な状態に陥ったのですが、奇跡的に危険な状態を脱し一命をとりとめます。彼女は１ヶ月近くをバラクラヴァの病院で過ごし、少し体力が戻った段階でスクターリに戻り、病院にほど近い高台に家を借り、この地でさらに１ヶ月近く静養することを余儀なくされたのです。



太線で囲われた部分がクリミアの行政区上の特別市セヴァストポーリ。内部は４区に別れ、セヴァストポーリ要塞は２の地域に、バラクラヴァは４の地域全体を指すほど広いのですが、病院は１の地域に最も近い海岸沿いの高台にありました。

早く仕事に復帰したい。気持ちは焦っても、身体が言うことをききません。発病から２か月後にフローは周囲が止めるのを振り切って仕事に復帰したのですが、以前ほどテキパキとは動けず、1 日にこなせる仕事量は眼に見えて落ちていたのです。クリミア半島の風土病であることからクリミア熱と呼ばれた感染症は、その後もフローが亡くなるまで、長期にわたってフローに病との戦いを強い続ける宿痾となったのです。

フローがスクターリの病院で仕事に復帰した２か月後 1855 年９月、頑強に抵抗していたロシア軍のセヴァストポーリ要塞が陥落します。ここにクリミア戦争は大きなヤマを越え、以後散発的な戦闘は続きますが、事態は戦争終結に向けて動き出します。こうしてスクターリの病院に運ばれてくる負傷兵の数は減ったのですが、伝染性の疾病で運ばれてくる兵士は減少せず、医師や看護師たちはなお忙しく働き続けたのです。講話条約が結ばれ、残された傷病兵の回復を待って病院を閉じ、残務整理を終えて帰国の途に就くまでには、まだ時間が必要だったのです。クリミア熱の後遺症が残った身体に鞭打って、フローは看護師たちを督励し、傷病兵には笑顔を向けていましたが、仕事中に倒れないよう休み休み働くしかなかったのです。

後日談になりますが、帰国後も体調の優れなかったフローは、彼女の体調を案じたヴィクトリア女王の肝いりで、1857 年に評判の名医の診断を受けたのですが、当時の最高水準の医学をもってしても病名を特定することは出来ず、慢性疲労症候群と診断されるにとどまったのです。病める身体に鞭打ってフローは在宅で出来る仕事をこなしますが、1860 年以降は、日中もベッドの上で過ごすことが多くなり、それでもあちこちに手紙を書いたり、指示を出したりと、明晰な頭脳で出来る限りのことを続けていったのです。

追記　フローを悩ませ続けた疾病の正体は、1995 年にイギリスの権威ある医学雑誌に掲載された論文で、ブルセラ病の慢性症状と正式に診断されました。この説が、現時点で最も権威ある説とされています。

（続く）

王禅寺境内の石造物 －古文書講座より－

古文書講座では数年前から「志村家文書」にある王禅寺関係史料を読んできました。そこには江戸時代境内にあった堂舎のほか観音像・供養塔・池等が書かれています。また昭和 49、50 年に川崎市が調査した市内の石造物報告書を読むと、王禅寺には江戸期の石造物が 30 点、明治以降のものが 6 点、年代不明が 3 点載っています。そこで去る 6 月 3 日に王禅寺副住職の御案内のもと、古文書に記されている石造物が境内のどこにあるのか調べてみました。最も古い石造物と思われる正観世音像（1679 年）や、江戸時代大流行した徳本上人名号塔など、多くは元々の本堂である観音堂の境内にあります。見つからなかったのは水鉢や三疋猿等。また境内の各所にあった石地蔵を近年まとめて六地蔵としています。

報告書には、明治以降村の別の所から寺に移されたと思われる庚申塔・道祖神・馬頭観音等がありますが、刻字が不鮮明で確認できませんでした。分かったのは 39 点中 24 点。再度調べる予定です。

なお、副住職から「古い石塔は壊れやすいので、手を触れないでいただきたい。」とのご注意を頂きました。　（文　飛田三枝子）

志村家文書に書かれている明和 5 年(1768 年)の廻国供養塔

柿生郷土史料館　第 93 回カルチャーセミナー

ネパールの暮らしと文化

～40 年通い続けるネパール舞踊研究家が見たネパール今昔～

講　師　岡本真宥氏（和光大学非常勤講師）
日　時　9 月 8 日(日)13 時 30 分～15 時 30 分
会　場　柿生郷土史料館(柿生中学校内)特別展示室
参加費　無料。どなたでも参加できます。

岡本先生は、1985 年からネパールに通い続けておられる、日本のネパール文化研究の第一人者です。ネパールは、大変な親日国で、お釈迦様の生誕の地でもあります。そんなネパールのあれこれを皆様にご紹介いただきます。

南部、古代ミティラ王国の地で暮らす先住民マデシの人々

柿生郷土史料館　第 94 回カルチャーセミナー

セイノカミ（どんど焼き）と地域文化 ～岡上の事例を端緒として～

講　師　小関和弘氏(柿生郷土史料館専門委員)
日　時　10 月 26 日(土)13 時 30 分～15 時 30 分
会　場　柿生郷土史料館(柿生中学校内)特別展示室
参加費　無料。どなたでも参加できます。

岡上では現在、「岡上町内会」と「岡上西町内会」で「どんど焼き」を行っています。その歴史や現状を踏まえ、さらに全国各地の「どんど」にも目配りしながら、暮らしとセイノカミ（道祖神）、小正月の行事の社会的意味について考えます。ご参加の皆様から様々なご意見を頂きたいと思っています。

岡上西町会のどんど焼き 祠の組み立て作業

第 22 回 特別企画展

祝川崎市制誕生百年！　写真で辿る川崎市の百年

1939 年の川崎市誕生から現在までの川崎市変貌の様子を、皆様に見ていただく企画展です。期間を 11 月 17 日まで延長します。柿生郷土史料館まで足を運んでいただけると幸いです。

◆期間／2024 年 6 月 15 日(土)～11 月 17 日(日)　◆会場／柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日　：９月８・１５・２２・２９日（日曜日）　　１０月５・１２・２６（土曜日）
◎開館時間：午前１０時～午後３時